

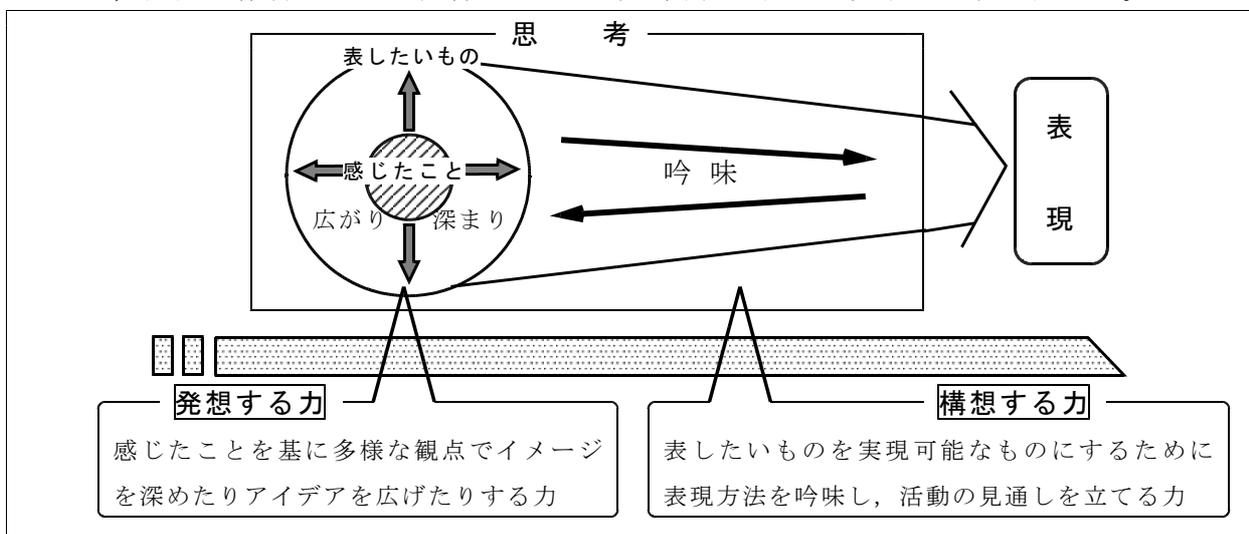
図画工作科

1 育成したい「思考力」

- a 感じたことを基に多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりする力
(発想する力)
- b 表したいものを実現可能なものにするために表現方法を吟味し、活動の見通しを立てる力
(構想する力)

自分の手でものを生み出していくことが特徴である図画工作科では、「何をつくろうか」「どんなアイデアがあるか」という発想と「表したいものを実現するためにはどのような方法が適しているか」という構想が思考の中心となると考える。

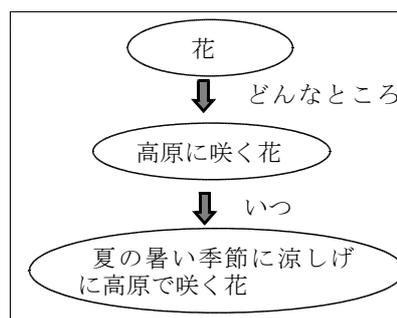
そこで、図画工作科において発揮される思考に関する能力を以下のように捉えた。



a 感じたことを基に多様な観点でイメージを深めたりアイデアを広げたりする力（発想する力）

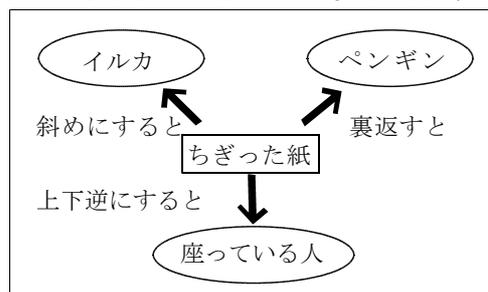
○ イメージを具体的に思い描く力

例えば、花の絵を描くとする。はじめは、概念的で記号のような花（例：チューリップ）を思い浮かべる場合が多い。しかし、その花がいつ、どんなところに、どのように咲く花なのかといった「時間的」「空間的」な観点をもつことで花や周りの様子がより具体的になり、誰もが思い描く一般的な花から、自分が表したい固有の花になるのである。



○ 色や形にかかわるアイデアを広げる力

例えば、無造作に紙をちぎる。すると、その紙の形が動物に見えることがある。さらに、紙を斜めに置いたり裏返したりすると全く別のものに見える。このように「向きを変えたら」「裏返したら」等の観点をもってアイデアを広げていく力のことである。上記の花の例に当てはめると、「花びらの色を変えてみたら」「大きくしてみたら」「向きを変えてみたら」等、描く対象を色や形にかかわる観点から見つめ直すことで、アイデアを広げていくことができるのである。



b 表したいものを実現可能なものにするために表現方法を吟味し、活動の見通しを立てる力
(構想する力)

広がり深まった発想から表現したいものを決め、その実現のために表現方法や材料を考えたり活動の計画を立てたりしながら、実現可能な形を考える力である。すなわち、表したいことと材料や場所等の特徴、構成の美しさや視覚的な効果等を照らし合わせ、表現方法を吟味し、取捨選択していく思考のことである。この思考は、表現したものが表したい感じに合っているか吟味する場合にも働く。

また、これら二つの力を支えるのは、身の回りのもののよさや美しさを感じ取る感性だと考えている。「きれいだな」「面白い形だな」といった情操にかかわる部分が感性であるが、上記の「思考力」は、この感性に常に支えられながら高まっていくものであると考える。

2 「思考力」を育成する授業づくり

実践事例 (第5学年)

「どんなカンジ? 漢字アレンジ」

学習指導者

みやわき みつこ
宮脇美津子



(1) 単元について

① 育成したい「思考力」

漢字から連想する対象のイメージを深め、表したいイメージと線や色等の造形要素を結び付け、様々な視点から表現の工夫を考える。

② 「思考力」を育成するための教材開発

本題材は、漢字から連想する対象のイメージを深め、漢字をアレンジしデザイン文字をつかっていく。その際、感情を意味する「喜」「怒」「悲」「楽」の4個の漢字を扱う。このような概念的な漢字を扱うことで、目に見えないものが見える形にいかにか組み込んでいくかという思考が必要になり、主題を考え表し方を吟味するという高学年で大切にしたい思考を培える。

このような題材の場合、いきなり、漢字のアレンジを考え、それに試行錯誤しながら修正を加える等して完成させていくという展開が多かった。そのため、一つ特徴を見つけるとすぐに表現に取り入れようとしたり、一面からしか特徴を捉えられず、十分なアレンジができなかったりすることがあった。これは、子どもの意識が始めからアレンジすることに向いており、表現の基となるイメージの深まりが不十分だったからではないかと考える。

そこで、本題材では、「漢字から連想する対象のイメージを深めていく段階」、「漢字をアレンジしていく段階」に分け、それぞれの思考に集中できるようにする。まず、4個の漢字の中から一つ選択させ、その漢字から思い浮かんだ言葉をカードに書かせていく。始めは思い付いた言葉を次々に書いていくので、抽象的な言葉が多くなる。そこで、共通課題漢字として「快」を取り上げ、具体的な様子や場面を話し合うことで、イメージする際の観点を見出す。そして、自分のカードを振り返り、その漢字に対する対象のイメージを具体的にもたせたい。さらに、そのイメージを言葉だけでなく「色」や「形」という観点からも見つめ直し、アレンジの段階へとつなぎたい。

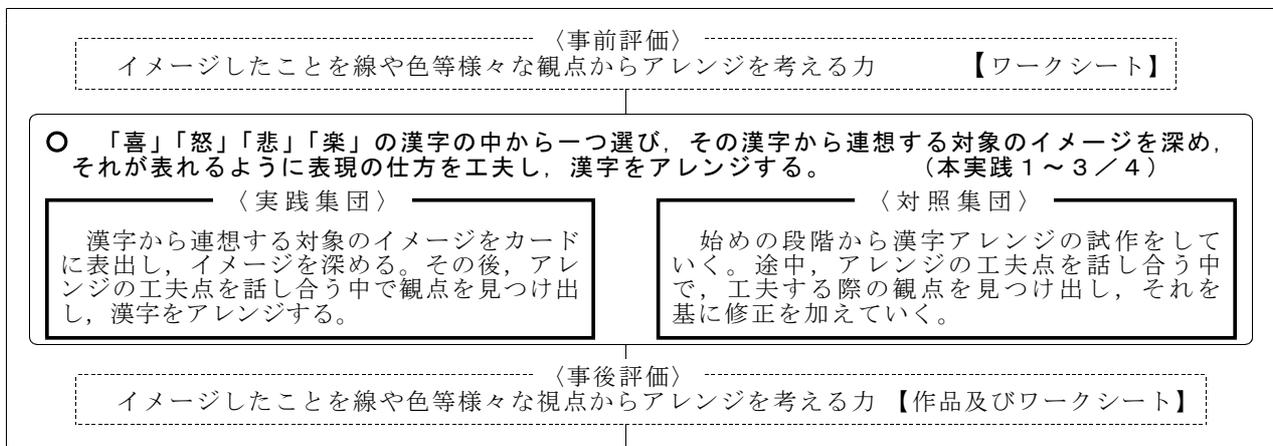
③ 脳科学の知見との関連

概念をよく知っていればいるほど新しい特徴が創発する可能性が大きい。

スティーブン＝スミス・ジェーン＝ハーリー 他

上記の知見から、何か新しいものをつくり出す際には、その基となるものの概念が確立されている必要があるということが分かる。そこで、「イメージを深める段階を設け、漢字から連想する対象のイメージを具体的にさせることで、表現が高まるだろう」という仮説を立てた。漢字のイメージを具体化させる際には、それをカードに書かせる活動をする。頭の中にぼんやり浮かんだイメージを目に見える形にすることで明瞭にしていくためである。また、カードにすることで、並べ替えや増減が容易になる。このよさを生かし、カードを自分の表したいイメージに合わせて取捨選択したり、新たに言葉を付け加えたりして整理できるようにする。このような過程で徐々に自分の表したいイメージを具体化させ、表現につなげるようにしたい。

(2) 脳科学の知見に基づいた実践とその検証方法



(3) 本実践の有効性の検証

① 子どもの様相から

「喜」「怒」「悲」「楽」の中から一つ選び、その漢字の意味する対象のイメージについて、頭に思い浮かんだことをカードに書いていった。「『喜』だと、うれしい、笑顔・・・。」等、子どもは次々言葉を書いていったが、その言葉は抽象的であった。

そこで、共通課題漢字「快」を取り上げた。各自が「快」からイメージした言葉をカードに書き、教師はそれを板書した。「快」とのつながりがよく分からない「光る水」「家」等の言葉に対しては質問が多く出たので、一つ一つ共有化していった。しかし、「すっきり」「気持ちいい」等の抽象的な言葉には質問がなく、全員がイメージできる



として納得していた。そこで、「気持ちいい」と書いた子どもにその言葉が思い浮かんだ理由を尋ねることにした。すると、「私は、朝起きた時の布団の中が気持ちいいです。」「僕は、暖かい部屋で本を読む時です。」等、自分の経験から気持ちいいと感じたことを語り始めた。このような中で、子どもは、同じ言葉をイメージしてもその背景は違うことに気付いていった。

その後、自分が選んだ漢字のカードを振り返り、体験に基づいたもののみを残すことにした。そして、そのカードにその時の会話や音等を思い出しながら言葉を付け加え、イメージをより具体化していった。

さらに、そのイメージを漢字の字形にとらわれず、線や色で表してみる活動（試しの活動）

を行った。「妹とけんかをした時、すごく腹が立ったけれど、少し自分もいけないなという気持ちがあったから、暖色で線を太く描いた中に少し青色をにじませて入れよう。」等、具体的な場面を思い浮かべながらそれに合うように色や線を変えて表現していった。

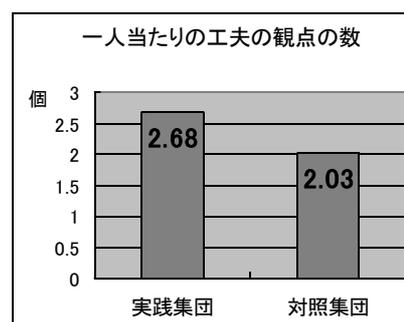


実際に漢字をアレンジする際には、試しの活動で表現したものの中からアレンジに使いそうな部分を選んだり、新たに思い付いた表現を付け加えたりして、自分の表したいイメージが表現できるように色や線を工夫し、試作品を何枚もつくる姿が見られた。



② 検証データから

表現の工夫を「アレンジした観点の数（見立て、色、濃淡、線の太さ等）」から検証を行った。事前評価では「冷」を、事後評価では、本題材で実際に扱った漢字（「喜」「怒」「悲」「楽」の中から選んだ漢字）を対象に、それぞれの漢字について、自分の工夫点をワークシートに書かせ、アレンジした観点の数で検証した。教師側から見て表現の工夫があるように感じられても、本人の自覚がなければそれは工夫とは呼べないので、そのような場合は省くことにした。その結果、事前評価では、一人当たりの工夫した観点の数に差は見られなかったが、事後評価では、実践集団は2.68個、対照集団は2.03個の工夫点を見つけ、実践集団の方が高い数値を示した。そこで、t検定を行ったところ、有意傾向が見られた（ $t(77) = 2.95, p < .10$ ）。



③ 考察

これまでに述べてきたことから、「イメージを深める段階を設け、漢字から連想する対象のイメージを具体化させた後にアレンジを考える方が、表現が高まる。」ということが言えそうである。

これは、実践集団において、イメージを会話や音等の観点を用いて具体化させたことで表したいものが明確になり、それを字形にどう反映していくかという意識を子どもが強くもったからだと考える。一方、対照集団では、アレンジする際の工夫の観点を意識して表現していったものの、イメージが漠然としていたため、強いこだわりをもつことができず、「『喜』の口の部分を笑った口にしよう。」といった、字形から発想してイメージに合いそうなものを当てはめていくという意識が強かった。そのため、様々な工夫の観点を組み合わせて表現するという意識が弱く、ある観点を表現できるとそれで満足していたのではないかと考えられる。この意識の違いが前述したような結果を生み出したと推測できる。

併せて実践集団では、漢字をアレンジする前にイメージを色や形で表す活動をもったことで、イメージと表現の工夫との結び付きを強くしたとも言える。字形にとらわれず、自由に表現できるため、筆を使わず息を吹きかけて表す等の新たな表現方法も発想しやすい。このような体験がアレンジする際のヒントとなり、表現を高めていくことができたと考えられる。

授業リフレクションでは、イメージを深めていく際の観点を精選やその意識のもたせ方等について議論がなされた。今後、どのような手だてを用いることが有効であるか研究を深めていく必要がある。